

早稲田大学図書館
教林文庫

『猿鹿懺悔物語』（翻刻）

田 嶋 一 夫

要 旨 織田信長の比叡山焼討を、比叡山に近いと思われる立場から描いた『猿鹿懺悔物語』について、教林文庫本（早稲田大学図書館蔵）を翻刻し、簡単に書誌を記したものである。

本書は早稲田大学図書館の中にある教林文庫というコレクション中の一書である。織田信長の比叡山焼討を、比叡山にきわめて近い立場から描きながら、焼討された原因を、比叡山の悪徒、逆徒の行為の結果としてとらえている点において、わずか七葉という小品ではあるものの、中世から近世への文学史の間隙を埋めるものとして貴重な一書である。私はすでに、本書について、『猿鹿懺悔物語』について―信長の叡山焼討と文学に関する一考察―と題して、『国語と国文学』（五一巻九号）誌上に発表し、そこで、書誌、内容と形態、成立年代の推定、思想的性格について考察し、文学史上への位置づけを試みた。しかし本文そのものを紹介する機会がなかったため、今回ここに翻刻するものである。尚、翻刻に当り、前稿とも若干共通するが、書誌及び翻刻に当っての具体的な方針を記しておく。

書誌

写本一冊。外題（直）、内題ともに「猿鹿懺悔物語」、装幀は中形やや豎長本で和綴。 竪二三・五センチ、横一六・八センチ。墨付七丁。印記は「教林蔵章」（表紙裏）、「徳順」、「天台山兜率溪鶏頭院」、「早稲田大学図書館蔵書」（以上一丁表）とある。奥書には、

右借西塔妙観院本謄寫

宝永六年夏月己講敝覚

とある。つまり宝永六年（一七〇九）敝覚の書写したものである。敝覚は鶏頭院の第八世である。

伝本は他に叡山文庫に一本蔵する。叡山文庫のものは、外題（直）、内題ともに「猿鹿懺悔物語」、体裁は竪二四・一センチ、横一七・〇センチ、印記は「山門無動寺蔵」「沙門真超」の二つがある。奥書に、

文政十一年戊子秋八月上旬日以鶏頭院藏本令書写之者也

叡嶽東塔執行探題兼戒壇院知事前大僧正 豪實（花押）

とある。ここにいう鶏頭院藏本が先の教林文庫本であることはあきらかであり、かつ行数、字配り等の一致、字体の酷似などからして、現在叡山文庫に蔵するものは、教林文庫本の影写本である。『国書総目録』には、『明徳院無動寺（文政一—豪実写）』の記述がみられるが、これは本書をさすと思われる。

翻刻はおよそ左の如き規準に従った。

一、漢字の字体はなるべく底本のままとしたが、次の略体字はそれぞれ当用する字体に改めた。

猿 ↓猿 悪尸↓悪魔 鹿 ↓鹿

思 ↓思 契 ↓契 卍 ↓懺悔

并 ↓菩薩 獸 ↓獸 灵 ↓靈

隠 ↓隠 衆 ↓衆 睿 ↓睿

遮那↓遮那 具肩↓鼠肩 並発↓並幾

簾 ↓簾 褱 ↓褱

二、改行は底本の通りとした。

三、底本各丁の終りには「を付し、その丁数と表（オ）・裏（ウ）の別を略記した。

四、ルビはすべて底本のものである。

（付記）

本書の翻刻を御許可いただきました早稲田大学図書館に感謝いたします。殊に種々御配慮くださいました特別資

料室、柴田光彦氏に厚く御礼申し上げます。

猿鹿懺悔物語

抑比ハ元龜二年仲冬廿日余事ナルニ有ル卑猿」

一ッ名心仕法名ヲ猿猴房ト付ク不レ裁不レ誘自ラ」

薄墨色ノ衣ヲ着シ嵯峨ノ尺迦堂參詣致」

礼拝ナト參セ候所ニ又何ク共不知鹿ノ獅子」

一ッ參り合テ是モ礼拝行ヘシ法施ナト參セ候」

漸ク有テ彼等懺悔懺悔ノ物語最ト憐ニ覚ヘ候」

先猿鹿問云御邊ハ如何ナル子細有テ左様ニ浮」

世ヲ厭給ヒ候ソト云ヒケレハ鹿答云去レハ吾等ノ」一オ

仕奉ル春日ノ明神ハ本ハ久遠実成ノ古佛ニテ」

渡セ給候ヘト衆生添度ノ為ニトテ権リニ淨飯」

大王ノ御子悉達太子ト現生シ成花ノ袂ヲ引」

替ヘ金泥駒ニ乗シ嶮キ檀特山ニ攀上リ阿」

羅々迦羅々ノ仙人ヲ為レ師十九出家シ難行苦行」

ノ功ニ依三十成道マシ」テ始テ本敎経ヲ三七

口雖被レ成ニ思惟」衆生ノ根機未熟ニシテ佛意ニ難レ至」

事ヲ思召瑤珞細罽ノ淨服ヲ脱キ捨テ戸弊垢」

賦ノ衣ヲ着シ鹿野園立出給テ十二年ノ間阿含」一ウ

經ヲ御覽成擬宜誘引彈奇洩汰事終リ法」

花ニ至リ如我昔所願今者已満足化一切衆生皆」

令入仏道ト説給此ノ文ノ意ハ如我昔所願今者」

已ニ満足シテ化ニ一切衆生ニ皆令入ニ仏道トハ思召セトモ」

是東隅ニ留テ粟散邊地ノ小国アリ大日本」

國ト名ク彼ノ国ノ無仏世界ナルヲ憐レミ思召シ垂迹方

便マシクテ春日大明神ト顯レ給去レハ昔シ靈」

驚山ニシテ妙法ケ經ヲ説キ給今ハ衆生ヲ度セントテ」

大明神ト顯レ此山ニ住シ玉ヘハ驚ノ高根トモ三笠ノ」ニオ

山ヲ仰覽セヨト和国ノ風俗ニ云習ヒ故シモンカシ雖然

時及澆季ニ世至ニ末世ニ人皆不貴ニ仏意ニ輕ニ五命ニ天」

下播^{ハハカ}兵乱ヲ起春日ノ麓般若坂ニ陣ヲ取り剩」

城郭ヲ構ヘ致ニ閉籠一処ニ諸家ノ武士是ヲ憎^{ミツ}彼ノ」

城郭ニ推寄數年ノ合戦ハ帝尺修羅ノ戦トモ」

可レ謂嗚呼拙哉痛哉三國ニ无レ隱東大寺ノ大仏殿ニ」

火ヲ懸テ十六丈ノ舍那ノ靈像頓ニ炬灰ト成リ拳」

給懸ル浮世ニ生レ合ヒ加様ノ憂目ヲ見ル事カト」
存シ掛ル姿ト罷リ成テ候ト云ケレハ猿聞テ御邊」ニウ
堯心ノ基尤神妙々々去テ又吾等カ加様ニ罷成」
子細ヲモアラ〜語テ聞セ申サン夫吾山ハ桓武」
天皇傳教大師靈山聽法ノ芳契ニ依テ九重ノ」
帝都ヲ築九院ノ佛閣ヲ立ツ一車ノ兩輪一鳥ノ」
双翼ナリ若一モ虧ヌレハ天下不ニ安寧ニ其芳契和朝ニ」
不レ限ニ三國傳來ノ子細有リ先天竺ノ靈鷲山王」
舍城ノ鬼門ニ建災難ヲ払ヒ辰旦ノ天台山ハ長」
安城ノ鬼門ニ立テ惡魔ヲ降伏シ本朝ノ比叡山ハ」
平安城ノ鬼門ニ立テ惡魔ヲ払フ去レハ當初何レモ」三オ
天下不ニ安泰ニ王城ヲ此彼コニ移サセ給國ハ已ニ七ケ」
國所四十八ヶ処ト覺テ有リ何モ不ニ安泰ニ其」
故者何レハ王城ノ鬼門ニ妙法修学ノ山无キ故ニ依」
也去テ社ソ光仁桓武御宇ニ奈良ノ都ヲ今ノ」
京ニ移サセ給去レハ古ヘノ奈良ノ都ノ八重桜今日」
九重ニ匂ヒケル哉ト仕リ叡慮ニ預リシモ此ノ」
故ソカシ爰以王城ノ鬼門ニ當ル所ノ比叡山ヲ天」

『猿鹿懺悔物語』（田嶋）

台山トモ号シ嶺ニハ遮那ノ梢ヲ双ヘ戒定恵ノ」

三学ヲ学三塔ト是ヲ名ク一念三千ノ觀法ヲ擬シ」三ウ

三千衆徒ヲ並居止觀明靜前代未聞ノ明鏡ヲ磨」

キ玉泉ノ流ヲ啄^{ツクハミ}有門空門亦有亦空門兆有兆」

空門四門彼道ノ春ノ花ハ匂ヲ三千衆徒ノ袂ニ薰シ」

圓屯無導ノ秋ノ月ハ光ヲ十六谷ノ水ニ浮フト」

見ヘテ候去テ又麓ニ山王和光ノ社薨ヲ並フ去レハ」

大宮ニ宮聖眞子ノ三聖ハ尺迦弥陀薬師ノ三仏也」

然ニ尺尊出世无窮ノ不ニハ恩徳^{ニテ}争弥陀薬師難」

思利益ヲ知ンヤ尺迦ハ此土ヨリ撻遣シ弥陀ハ彼ノ国」

ヨリ來迎ス但其ノ期未^レ定十二願王ノ誓約ニ依リ」四オ

八菩薩ノ引接ニ預リ五却十念ノ本願三佛一鉢ノ」

利益誰カ肯ヘテ是ヲ不信更^ニ次ニ八王子客人」

宮十禪師三宮四社者千手十一面地藏普」

賢ノ四菩薩也或娑婆世界施無畏ノ大士或」

濁世末代ノ能化或ハ一乘実相ノ性鉢也各三聖」

行化ヲ扶ケ鎮ニ四明ノ洞ニ坐シ現世無邊ノ願望ハ」

七社ノ冥助ニ依テ万歳ノ果報ヲ感シ當來三」

明ノ覺月ハ一乘ノ薰修ニ酬テ九品ノ蓮臺ニ

生ン抑此ノ靈地者無始無終ニシテ始テ不私其故」四ウ

如何ナレハ人壽二万歳ノ當初迦葉佛出世ノ時四大

海ノ上ニ一切衆生悉有仏性如来衆徒無有反易」

ト波ニ立ツ迦葉佛此ノ波ノ留ル所ヲ佛法流布ノ

地ト示ント思召ス処ニ近江国志賀唐崎ノ邊リ」

今ノ大宮権現ノ波止土濃トヤランニ留リキサテ」

コソ波止土濃ト書テ波ミ止テ土濃カナリト読メリ」

懸ル三国才一ノ靈地タリト云ヘトモ後五百歳闕」

諍堅固ノ時ニ臨テ諸国兵乱起リ五畿内ニ」

乱レ入り王城已ニ喧シク成リ行ケル文武百官公卿」五オ

殿上人雲客卿相ニ至迄尽ク浮沈ニ及ヒ給フ」

時ニ時節到來シテ延暦寺ノ惡徒恣ニ惡逆无」

道ノ構ヲ企テ碩学密徳ノ教化ニモ不レ乘又有

驗ノ行者ノ下知ニモ不レ從去レハ經ニ無知人中莫」

説此經ト説キ文ニハ邦有レ道則仕ヘ邦无レ道」

則可ニ卷^イ而懷」也孔子モ言ヒタリケレハ不及力」

法印和尚モ閉口シ玉ヒケルニ弥山門ノ逆徒謀叛ヲ」

企テ吾山ノ麓ニ敵味方軍兵ヲ招キ寄セ日々」

夜々ノ合戦修羅鬪諍トモ云然則山王大」五ウ

師ノ冥助ニモ背神明仏陀ノ冥罰ト覺フ彼等カ」

鼠肩ノ軍兵一手モ不レ取懸負テ引退キ无ニ

他際ニ成リ行敵ハ弥勝ニ乘リ七重結界ノ」

山上ニ駒ノ蹄ヲ懸上ケ干戈並幾軍兵谷」

々ニ乱入り楯籠衆徒ノ頭ヲ刎ネ山上山下貴」

賤緇素道俗男女此彼ニ押寄々々尽ク」

被ニ誅罰ニ剩ヘ三院十六谷ニ火ヲ懸ケ靈佛」

靈社堂舎仏閣不殘ニ一字ニ悉ク焼払昨」

日迄ハ寂光ノ臺トモ可レ謂靈地タリ今日イ」六オ

ツシカ引替ヘテ修羅ノ巷ト成リヌレハ身ノ置処」

無キ尽ニ加様ノ姿ト罷成テ候傳聞當寺ノ」

御本尊ハ尺迦ノ靈像ニシテ以ニ赤梅檀ノ師」

衣木ニ毘首羯磨トヤラン被ニ刻彫ニ世尊」

自ラ開眼ナサレシ靈像ナレハ後世ノ糧ヲ裏ント」

存シ是迄参詣致シテ候願クハ御邊モノノ角ヲ」

ハラリト落シ愚身ト心ヲ一ツニシカ、ル靈地ニトレ」

居ヲ慈氏下生ノ晝ヲ待給ヘカシト謂ヒケレハ」

鹿モ發露涕泣シヲツト答テ諸共ニ岩窟ニ」六ウ

苔ヲ蒲団ニ敷キ木ノ葉ヲ坐褥ノ衾ニカフリ」

浮世ノ嵯峨ノ傍ニ行ヒ澄ソ居タリケル時ニ」

狐ト申嗚呼ノ者落書ヲ一ツ立テ候」

言語道斷浮世ヲ鹿ト猿ノ皮薄墨色ニ染メ成ントハ」

ト読タリケリ又何ク共不知白髮タル翁」

一人詣ラレシ是モ狂哥ヲ被レ讀」

憂キ事ヲ猿ノ身ナレハ鹿モマタ後ノ世迄モ頼母敷哉」

天安羅々地平哩々北斗七星如在影向靈」

山一會儼然未散千秋萬歲ノ玉ヲ捧ント一ト」七オ

カナテ舞タリシ物語語コレ也」

右借西塔妙觀院本贍写」

宝永六年夏月己講殿覺」

」七ウ